

昭和51年度 ひまわり学級 (第2年度) の歩み

足利市立東小学校情緒障害学級

I はじめに

II 学級の概要

所在地、開設年月日、名称、学級数
職員組織、入級児童、指導形態、施設設備、平面図、在籍児童

III 治療教育の実践

治療教育、入級児童の実態、日課表
指導形態、児童に与えた治療教育例
児童の記録、観察記録用紙、成長の記録

III 今後の課題

V おわりに

I はじめに

情緒障害学級発足の昭和50年度当初の姿については、足利教育会の研究紀要№.13(昭和50年11月刊)でその概要を報告した。

本文では、当情緒障害学級のその後における状況の変化や学級諸施設設備の充足状態及び学級在籍児童の現状と指導の経過を述べ、最後に情緒障害学級がかかえる今後の課題について触れてみたい。

II 学級の概要

1 所在地

足利市昌平町2337. 足利市立東小学校

TEL. 0284-41-2610

(学級専用) 43-0058

2 開設年月日

昭和50年4月1日

3 学級の名称及び校内での呼称

足利市立東小学校情緒障害学級

… ひまわり学級

4 学級数及び児童数

1学級 5名

5 職員組織及び職員歴

校長 中村 章 (～51. 9. 30)

北林 良夫 (51. 10. 1～)

教 頭 佐藤 行雄

教務主任 堀越 健三

八木 庄吉

情緒担任 川田 昌宏

大島 清子 (～50. 9. 30)

佐藤富美子 (50. 10. 1

～51. 3. 31)

吹田 ゆき (51. 4. 1

～52. 1. 31)

新藤 文枝 (52. 2. 1～)

養護教諭 小林 和子

子学級担任

霜触 静江 (1年1組)

赤坂 政子 (1年2組)

宇津木トミ子 (2年1組)

中島 康子 (2年2組)

古川 弘 (4年2組)

6 入級児童の主因及び異動

(昭和50年度)

この年度の入級児童の主因は

1. 自閉的傾向及び自閉症 2名(M)

2. 自閉性精神薄弱 1名(W)

3. 登校拒否 1名(W)

4. 多動、精神薄弱 1名(M)

の4症状であった。

上記の児童に対して、昭和50年度末のそれぞれの改善状態から、次のように次年度以降の措置をとった。

自閉的傾向及び自閉症児2名については、昭和51年度も引続き当情緒障害学級に通級をさせる。

自閉性精神薄弱児については、親からの申し出と本人が小学校就学終了の年齢に達したこともあり、昭和51年度以降中学校の課程は就学猶予の措置をとり、家庭での母親の介護にもどす。

登校拒否児については、問題がない訳ではないが行動の上で変容と改善がみられるので居住区の普通学級同学年にもどす。

多動の上精神薄弱を伴う情緒障害児については、学習参加も望みたいがそれ以上に学級児童の仲間集団に参加させ生活訓練の必要性が強いので普通学級同学年にもどす。ならば個別指導が得られる精神薄弱学級がよいと思われるが、入級がいろいろの事情から不可能であるとのことなので上記のような措置をとらざるを得なかった。

(昭和51年度)

50年度末における措置の結果、本年度においては3名の児童が卒業及び転出となったのに伴い、新規に該当児童として自閉傾向及び自閉症児を3名受入れた。この結果、在籍5名の児童が全員自閉傾向あるいは自閉症ということで学級が編成された。

7 学級の指導形態

昭和50年度と同じで、固定式校内通級制をとり、在籍学級である情緒障害学級を親学級とし、そこから当該児の通級先とされているそれぞれの子学級(1の1、1の2、2の1、2の2、4の2)へ児童の状態にあわせ通級参加をさせるのである。

8 施設、設備

昭和50年度の第1年次として設備された諸施設、設備も併記し、施設、設備の充足状況を具体的に掲げておく。

片仮名記号についている印は次の通りである。

㊦ 学級開設及維持のため、市費及び補助金による購入物品

㊧ 学校予算による購入物品

ウ 無印は校内他学級より借用物品
物品名横の数字は数量を示す。

1. 遊戯室一(A)

(品名)	50年度、51年度
ア トランポリン	1
㊦ 投的板	1
㊦ 室内用スベリ台	1
㊦ 移動式ろく木	1
㊦ 自転車	2 ・ オ 2
㊦ 足踏自転車	1
㊦ カラーマット	1
㊦ 跳箱	1
ケ 輪投げ	5
コ オルガン	1
サ ボーリング	2
㊦ 船型シーソー	1
㊦ ホワイトボード	1
㊦ 三輪車	
ソ 電話機(学習用)	1
タ スピーカー	2
㊦ カラートンネル	・ 1
㊦ 砂遊びセット	1
㊦ 円型プール(ビニル)	・ 1

2. 遊戯室一(B)

㊦ 組木(大型) 1

①	箱形積木	1	
②	人形劇舞台	1	
③	指人形(10個)	1	
オ	積木(小型)	1	
④	移動式整理かご車	1	
⑤	囲碁1式	多数	
ク	おもちゃ	1	
⑥	和式ままごとセット	1	
⑦	洋式ままごとセット	1	
サ	横長食卓	•	1
⑧	備品庫(上下2段)	•	1
ス	オルガン	•	1
セ	事務用机、椅子		

3. 学習室

ア	児童用机、椅子	5	•	3
①	円形テーブル	1		
②	テープコーダー	1		
③	プレーヤー	1		
オ	柱時計	1		
カ	たたみ	4		
キ	横長食卓	1		
ク	カラーテレビ	1		
ケ	児童用ロッカー(木制)	1		
④	配膳台	1		
サ	給食用具格納箱	1		
⑤	回転式黒板	•	1	
⑥	本棚	•	1	
セ	児童図書	•	多数	

9 情緒障害学級平面図(S52. 2. 1 現在)

昭和50年6月の平面図(1)と比較すると大筋において変りはないが、2か年の指導の中で徐々に改善を加えた結果図(次頁参照)のような現状に至った。

主な変更を掲げると、プレールームを1室の

4. 研究室(情緒障害学級職員室)

⑦	事務用机、椅子(スチール製)			2
イ	(木製)			4
備	⑧ 備品庫(上下2段)	1	•	⑨ 1
エ	本箱	1		
オ	棚	1		
⑩	ロッカー(2人用)	1		
キ	応接用椅子	2	•	⑪ 1
⑫	電話機(本電話)	1		
ケ	電話機(学習用)	1		
コ	膳写板	1		
サ	カッター	1		
⑬	ストップウォッチ	•	1	
⑭	写真機	•	1	
⑮	8mm撮影機	•	1	
⑯	8mm映写機	•	1	

5. 面接室(父母控室)

ア	応接用椅子	1		
イ	本箱	1		
ウ	書棚(教授用図書)	3		
エ	備品整理戸棚	1		

6. 東庭

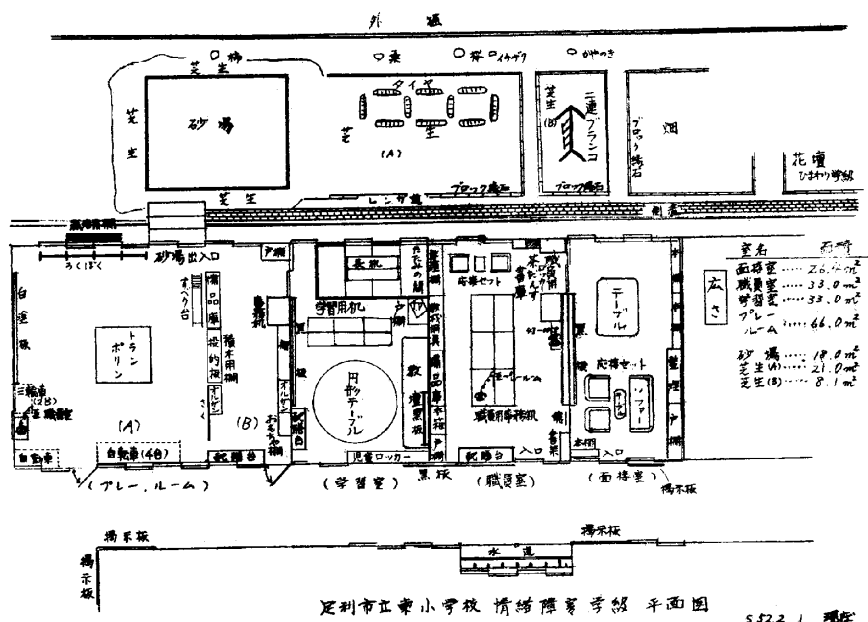
⑰	砂場	18m ²		
⑱	芝生	29m ²		
⑲	移動用ブランコ(2連式)	•	1	
エ	タイヤ(10本)	•	1	

状態から(A)、(B)の大小2室に分離し遊戯療法に使用する道具を主として動と静のものとした。

学習室では、室の西半分を主に食堂用と設計変えを行なった。室内が混み合った感じがなくてもないが、それぞれの機能に合わせた指導が

でき効果的である。

(1) 足利教育会研究紀要No.13 P 3~18 足利市
における情緒障害学級について…平面図参照



10 在籍児童について

1. 通学区域と児童数（居住地単位）

学区 児童数	柳原	山辺	山前	名草	矢場川	計
男	1	0	1	1	1	4
女	0	1	0	0	0	1
計	1	1	1	1	1	5

2. 年齢別児童数

学区 児童数	6	7	8	9	10	11	計
男	1	3	0	0	0	0	4
女	0	0	0	1	0	0	1
計	1	3	0	1	0	0	5

3. 学年別児童数

学区 児童数	1	2	3	4	5	6	計
男	2	2	0	0	0	0	4
女	0	0	0	1	0	0	1
計	2	2	0	1	0	0	5

III 治療教育の実践

1 治療教育について

一般に治療といった時には、医療の分野での治療がイメージとなって浮んでくる。この用語は元来医学関係用語であり、その意味するところは広辞苑によれば①病気をなおすこと、②疾病の軽減、健康の回復をはかるためにする一切の医学的方法。治療。と示されている。

このような治療の概念が教育の場に取り入れられるようになったのは、情緒障害児の教育において、情緒の安定や拡大のために、さらに人間関係の成立や改善のためには、障害児に対して治療的な扱いなしには成し得ないからなのである。

2 新入級児童及び継続指導児童の実態

児童氏名は、学級在籍番号にて表わした。()の中のローマ字は性別を示す。状態像の明かでない診断名については不明とした。

Ⅷ1 6才 (M)

(相談歴)

- 1 足利赤十字病院
- 2 足利市立助戸小学校校言語治療教室
- 3 栃木県県南児童相談所
- 4 国立療養所足利病院

(診断名)

精神運動発達遅延 (国立療養所足利病院)

(児童の現況)

- 自閉的傾向のうえ多動である。
- 自傷行為がみられる。
- 言語はなく、わずかな音声を発する。
- まなざしはわりあいと合う。
- 依存性が大きい。
- 数字に対する関心が高い。

(現況の詳細)

- プレールームや校庭での遊びの状況をみると一人遊びで、次々と遊びの場所が移動している。
- 欲求不満になると担任や介護者をはたくなどの行為も時折りみられるが、自身の左手の甲を噛んだり、右の尻をべたべたとたたくことが特に目立つ。その時間は10数秒たらずであるが、激しい時は手の甲を噛みながら尻をたたく。手の甲には歯の特に強くあたる所2か所が腫れに変化している。
- 聴こえはあるが、言語はみられない。担任や介護者の指示はある程度理解はできる。しかし、本人は言語は話せず、パ行の音を時折り発する。パパとか、ババあるいはババババ、バビーなどを大声で発するが、その意味は現在の情態像では担任や介護者に理解できない。
- しかし、本児に「何かお話があるか、話してごらん。」と担任や介護者が語りを

促すと、担任や介護者の耳元に口を寄せクウクウと鳩の鳴くような音を発し、いかにも何事かを語っているような態度を示すことがある。

- 担任や介護者と本児の間では、わりあいとまなざしが合う方である。自分の周辺の人の目の動きや顔の表情の変化も注意しているらしく、ちょっとした変化にも敏感に行動する。
- また、時折り目を細めて前方の空間を見つめて、何やら幻想にふけるかのような様子をみせる。
- 指しゃぶりが目立ち、介護者にだかりたがる。何かしてもらいたいことがあると担任や介護者の手を持って連れて行ったり、また道具を持たせてやらせようとする。その要求がわりあいとしつこい程である。
- 数字に対する関心が強く、電話帳、百科辞典、カレンダー等の電話番号、頁数月日に特に興味を示す。1月以降はカレンダーに関心を寄せ毎日、ひと月ずつ順に書いている。さらに既製のカレンダーに記号やら数字を書き入れては眺めている。どうも、カレンダーの表面が全面記号やら数字で埋っていないと気持ちが落着かないようである。

(当面の目標)

- 自傷行為を取り除くこと。他の良性的行動に転換を図る。
- 一定時間の落ち着きが得られるようになること。
- セラピストの指示にパニックを起さずに従えるようになること。
- 形式的にでも児童の集団の中で生活ができるようになること。

(対処する指導)

- 日常身の自律を図るため、生活のきまりや躰が本児の身につくまで繰り返し指導する。
- 担任及び介護員、それに子学級同級生との対人関係を成立させ得るよう子学級への通級や交流について配慮する。
- プレーセラピーを多く取り入れながら言語指導を強化する。

№2 7才 (M)

(相談歴)

- 1 足利赤十字病院
- 2 足利市教育研究所教育相談室

(診断名)

書類不備により不明

(児童の現況)

- 自閉的傾向である。態度は内向的に感じられる。
- まなざしは時には合う程度。
- 言語はなく、わずかに叫び声を上げるだけである。
- 周辺に起こるある種の音に敏感に反応を示す。
- 高い所へ平気で登る。水遊びを好む。
- 落書きを所かまわずする。
- 一人遊びしかしない。

(現況の詳細)

- 男子の担任に接する時は、近づく前に逃げるように遠ざかるか、おどおどしているが、女子の担任や介護者には慣れ慣れしくからだにまつわりつく。
- 瞬間的にまなざしが合うこともあるが実際には本当に合ったのか疑問であることが多い。担任の側で遠目に合ったような印象を持ったのかも知れない。

ふだんは、周囲を眺めるのに首を横にかしげ、目を直角に近い角度にしてからみる。

- 言語はなく、自分の行動を規制されたり意に添わない行動を担任や介護者から要求されたりすると、「キーー、キーー」という音声を発する。母親の報告では、家庭において「バカ」とか「たくさん」とかある種の寝言を言うとのことであるが、登校中にはそのような事実には残念ながら遭遇していない。

たまに、何がおもしろいのか判断に困ることがあるが、担任や同級生の顔をまじまじと眺め(そんな時はまなざしがかならず合う)、突然「アハハハ、アハハハ」高笑いをすることがある。

- プレールームで音楽がスピーカーから流れだすと机の下へもぐり、耳をふさいでキーキーと叫んでいる。そうゆうことのあった後は、しばらくプレールームへは入りたがらない。その外、ダンプカーが教室横の昭和通りでだすエンジン音、地下道内での反響音などに対しても聞えると耳をふさいで嫌がる。その様子は聞えてくる音を拒否しているかのような感じである。
- トランポリン、ジャングルジム、ろく木、すべり台等高いところに登って平気でいられる。また、水遊びが大好きで、寒中でも冷たさを感じないのか、腕まくりをして平気で水道で水遊びをしている。歯みがきをやらせると、止めさせても目を離れたすきに何度でもこすり歯茎を痛めたことが幾度か起った。
- 鉛筆、白墨、クレヨン等筆記用具を持つと手当たりしだい何処にでもかまわず落書

きをする。線でぐるぐると連続模様のように書いているが、別に意味を見いだすことはできない。文字については、12月ごろから自分の姓の中の幾つかの文字を平仮名で憶えた。「き」「せ」は表記でき、「の」「お」については文字を見ると指でなぞってみせることがある。

- 一人遊びが大部分、担任に手を引かれていれば子学級集団にいられるが、それも長続きはしない。

自分より小さい児童を見ると、そばに近寄ってころがしたり倒したりする。

(当面の目標)

- 形式的にでも、できるだけ多く子学級集団に参加させて対人接触の機会を多く与えること。

(対処する指導)

- 担任や同級生との対人関係の改善を図り、成立するよう働きかける。
- プレーセラピーを多く取り入れながら言語指導を行う。

163 7才 (M)

(相談歴)

- 1 足利赤十字病院
- 2 栃木県南児童相談所
- 3 国立療養所足利病院
- 4 足利市教育研究所教育相談室

(診断名)

自閉的傾向 (栃木県南児童相談所判定)

(児童の現況)

- 昭和50年4月入学。在籍2年目。
- まなざしを強制的に指示されると合わせられる。
- 一人言をゆいながら、空中に何やら書くことがある。

- ノートに落書きする内容はTV番組に関連のあるものが目につく。
- 言語を有する。本児からの一方的な語り掛けも多いが、セラピストや介護者との間に会話も一部成立する。
- 身辺処理は同年令児と同程度にできる。
- 遊びに相手を求めて来ることがある。

(現況の詳細)

- 朝や下校のあいさつの際に、本児と担任との間でまなざしを合わせてあいさつをさせようと指導、訓練等を試みてきたがなかなか合わない。本児が合わせようとしないのか、あいさつの瞬間になると目が横へつうとそれてしまう。何だか意識的にやっているような錯覚を担任や介護者の側に起こさせる程である。

それでも1月以降「M君、先生の目はここだよ。」と指示と注意を重た結果やっと担任の目に注意する様子がみられるようになってきた。

- 時には空間を見つめ、口の中でぶつぶつと一人言をゆいながら、右手首を動かし、何やら文字の様なあるいは数の計算をするような仕草を見せる。本児の行動が済んだ後、声をかけているその間の様子を尋ねてみるが、こちらの聞いていないのか答えが戻らず委細は不明である。勿論、上記の様な状態



(鏡を見ながら書いた自画像)

になっている時は、はたから声を掛けても本児は反応を示さない。

- ノートに書かれた落書きを見ると、天気図、クイズのパネル、木枯紋次郎、減点パパ、競馬、相撲TV番組に関連のあるものが目立つ。文字やいろいろな知識もTVから大量に習得しており、理解も年齢相応にしている。一部の事柄については年齢以上の理解を示す。
- 前年度は一人遊びが多く、遊びの相手になろうとしても認めてもらいまでが大変であった。今年度後半になって、相撲野球、サッカー等に関心が広がりゲームや遊びの相手を求めるようになった。その相手も最初は担任だけであったが、いつの間にか子学級同級生、普通学級の上級生にまで広がっている。時には、校長他学年担任も相手をさせられていることも見られる。

(当面の目標)

- 自分の言語で、初歩的な感情表現ができるようになること。
- 一定時間、子学級担任の指示に従って子学級集団に参加できるようになること。

(対処する指導)

- 子学級における対人関係の改善を図り促進させる。
- 集団プレーセラピーにより仲間意識を起し、育てる。
- 一定時間座席に居て、学習に参加できる時間を徐々に延長する。

№4 7才 (M)

(相談歴)

- 1 足利赤十字病院
- 2 足利市立助戸小学校言語治療教室

3 桐生厚生病院

(診断名)

書類不備により不明

(児童の現況)

- 自閉的傾向がたいへん薄らいできた。
- まなざしは正常児とほとんど変らぬくらいよく担任や介護者と合う。
- 言語はないが、「ウー」「ウォー」、「ママ」「ママママ」等の音声は発することができ、また、聴こえは正常なのか、担任や介護者の簡単な指示は理解することができ、それを元に行動することができる。
- 文字に対する関心が強く、よく憶える。
- 身辺自立はできているが、一人っ子的ためか依頼心が強い。
- 運動能力は同年令児よりやや劣る。

(現況の詳細)

- 遊びの仕方やルールがわからないため児童集団の中ではわりあい勝手な行動が目立ってしまうが、担任や介護者の指示にはよく従う。
- まなざしに関する限りでは、自閉児特有の状態はみられない。あいさつ、学習中の呼名、本児からの要請に際しては、本児の目と担任や介護者の目はお互に視線が一致している。
- 言語に関しては、上記の音声が聞かれるだけであるが、本児に対して単語の音を真似させたり、鏡を見せながら介護者の口形を練習させると、本児が口形を真似て音声を出そうとする態度が強く感じられる。
- 聴こえは確かのように、担任やセラピストの指示に対して、うなずいたり音声で「うん」?と答えることができる。

- 文字に対する関心が強く、漢字、平仮名、片仮名、アルファベット等注目を集めた文字はなんでも憶えてしまう。憶え方も、登校途中で見た文字、TVの字幕、コマーシャル、登校後の学校施設等注目をひいた文字は写真のフィルムに写したように憶えてしまう。書かれた文字を調



(鏡を見ながら書いた自画像)

べると、画数の混みいった漢字では多少の誤りもあるが、そのほとんどは正確な文字で書かれている。ただ筆順については、正しいとは言えず文字の形が書けていると見た方がよい。

- 身辺における生活上の処理は、自身によってできるが、依頼心が強く担任や介護者をたよりにたがる。指導目標を達成するために手を貸さずに処理を遂行させると、困難に突き当たり泣いて救いを求める。

結果的には、本児1人の力で目標を達成する場合が多い。

- 運動能力は同年令児に比較して、やや劣っている。ラジオ体操などやらしめると形を真似てはいるが、自己流にしている状態であり、3~4才児の動作である。

ボールを投げさせると正面に投げず、全然方向の違うところへ放ってしまうことは、本児の判断力に問題がありそうで

ある。しかし、運動遊具の扱いは正常児と何ら変わりなくできる。特に、入学後に乗れるようになった自転車は、上手に乗りこなす。また、高い所も平気で登り降りして遊ぶことができる。

(当面の目標)

- 意志を伝達させる文を、文字を使って綴れるようになること。
- 母親への依存度減少のための改善を促進すること。

(対処する指導)

- プレーセラピーを多く取り入れながら言語指導を強化して行い。
- 子学級への参加を深め、子学級児童との対人関係の改善を促進させる。

№5 10才 (W)

(相談室)

- 1 足利赤十字病院
- 2 栃木県中央児童相談所

(就学後の異動)

- 1 足利市立山辺小学校
- 2 とちのみ学園

(診断名)

書類不備のため不明

(児童の現況)

- 自閉傾向
- まなざしはやや合う。
- 言語はあるが、エコラリアを伴い対人関係において会話が成立しないことが多く目立つ。
- 一人ごとをぶつぶつ言うが、語りの内容はTV番組のせりふが多い。
- 運動能力は高い方であるが、技術や方法を理解させるまで時間がかかる。

一人遊びが多く、ブランコ乗り固執

している。

- 学力は同年令児と比較すると相当の遅れが認められるが、個別指導によって徐々に回復の方向にある。
- 手先が器用で手芸を好み、ショールやマフラーを毛糸で上手に編みあげる。

(現況の詳細)

- 教室内での本児の行動は、下級生に対して世話をやくなど対人接触に進展の様子がみられるが、よく観察するとそれは本児の関心のある場面だけに限られている。例えば、給食時にエプロンを掛ける下級生に手を貸したり、ノートに文字の練習をしている下級生の手を持って、文字の書き方を教えるなどできる時である。
- まなざしが合うのは本児と介護者の位置が近い時で、3～4m離れてしまうとなかなか合わせるのが困難である。
- 言語は普通に有している。であるから本人の方から、担任や介護者、セラピストに話しかけることにおいては困らない。しかし、本児に語りかけることとなると、担任、介護者、セラピストにおいても、かなりの忍耐を要する。それは本児にエコリアがあるからである。そのため、対話や会話になると本児の理解している言語を模索しながら語りかけなければならぬ。わずか「はい」「いいえ」の返答を得るのに、思わぬ時間を過してしまうことが多い。
- 着換えをしたり、給食を待っている時によく一人ごとを言っていることがある。静かにその内容を聞いてみると、その大部分はTV番組の中でのせりふであるか、コマーシャルである。しかし、それらを語っている表情には感情を感じることはない。たんとした語りである。

- 運動能力について同年令児と比較してみても、劣っているとは思えない。演技について、理解させるまで確に困難な一面もあるが、方法がわかるとその技能の向上は早く身のこなしもよい。器械体操を好んでする。
- 休み時間は、ほとんどブランコに乗って終わる。よくも厭わずにと側から思われるほどで、放っておけば何時間でも乗っていて満足のようにである。他の遊びには関心を示さない。
- 学習は過去において満足すべき状態ではなかったし、また他者が指導できる様子にはなり得なかったと想像する。
現状では、国語の力が算数に比較してあると判断できる程度である。学習内容は低学年の教材を利用し、指導して本児が受け入れられる内容を繰り返し教えている状態が現状である。
- 入学後半年ぐらいの間、時々起していたパニックも年度後半では、その激しさがたいへん下火となってきた。当初は、物を手当たりしだい放り投げたり、泣いて奇声を張り上げるなど興奮状態が長時間続き手がつけられなかった。
その後、パニック解消のためにブランコをパニックの起るたびに与える方法を導入した。パニックの心理を本児の最高の遊具であるブランコへ転換し、パニック状態を沈静化させる手段とした。この方法は予想以上に効果を上げ、今年度後期には、ほとんどパニック状態に落ち入ることはなくなった。
- 手先は器用で、毛糸の編みものは厭わずに大きなものを編みあげる。しかし、これも全体的に構成すること困難である。

指導者の指示に従って、作品を仕上げることができるというのが現状である。

(当面の目標)

- 正しい話しことばを覚えさせ、対人関係において会話が成立するようになること。
- 子学級の学習に参加できるようになること。

(対処する指導)

- 担任や介護員との対人関係を成立させる。
- 子学級における対人関係の改善を図る。
- 子学級の学習に参加する機会を多く持たせる。(音楽、図工、体育、特活)

3 日課表

昭和50年度は、下のような日課表図1を編成して実施するよう努力したが、いろいろと問題が現われなかなか計画通り実践できずに終わってしまった。

(図1)

日課表		月					金					土				
時間	曜日	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5
8:30	1	△		△	△		△		△	△		△		△	△	
9:45	2	△	△	○	○	△	△	△	○	○	△	△	△	○	○	△
10:45	3	○	○	○	○	△	○	○	○	○	△	○	○	○	○	△
11:35	4	○	△	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△
0:15		○	○	○	○	○										
1:55	5			△	△											
2:45	6				○											

一入ひとりの障害児が、各々みな異った行動様式を示し、教師からの指示を与えるにしても1対1で噛んで含むような方法でしなければならない。そのため、子学級との交流にできるだけ介護者をつけるよう配慮したが、1対1の介

護をつけると残された障害児を1対4で担任がセラピーを行うことは、かなりの困難が伴い長期計画には乗せ難い。特に自閉児を5名終日介護していることは、その担任には、登校から下校までの間一時たりとも気の休まる間もなく、緊張の連続ということとなる。

日課表 (図2)

時間	曜日	月					金					土				
		No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5
8:30	1	△		△	△		△		△	△		△		△	△	
9:45	2	○	△	○	△	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△
10:45	3	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
11:35	4	△	○	△	○	○	△	○	△	○	○	△	○	△	○	○
0:15 (給食)		○	○	○	○	○										
1:55	5															
2:45	6															

昭和51年度は、前年度における実施の反省を元に、上記(図2)のような日課表を編成したわけである。特に日課表編成上で配慮したことは、次の諸事項である。

- (1) 学級という形態をとり児童を組織化しているわけであるから、障害児の登校後の主たる生活場所は情緒障害児学級とし、学級内での指導の強化を図る。
- (2) 自閉児の子学級への通級には、必ず担任あるいは介護者を伴って通級させ、事前に子学級担任とその参加について詳細な打ち合わせを済ませておく。
- (3) 指導者の側の勤務量の限界を明確にして無理のない指導及介護の体制をとる。

実践して10か月たった現在、当初予定した原則が、やはり思うようにならずいろいろと変更を余儀なくされている。一つには、学級の指導概念が未だ定まらないことにも、その原因が

求められるかも知れない。

できれば、少ないセラピストで最大の効果が上げ
得るかも知れず、その試みとして下記のような
指導を実施してみた。指導内容については、児
童の状態像によって臨機に変更を試みた。

4 指導形態

できるだけ、1対1の指導が可能になること
が望ましいが、集団指導（セラピー）が実践で

昭和51年 月 日 曜日

足利市立東小学校情緒障害学級

時刻	児 校時	NO・1	NO・2	NO・3	NO・4	NO・5	備考 1 2 3
		介護（ ）	介護（ ）	介護（ ）	介護（ ）	介護（ ）	
AM 9:00	1	登校	登校	登校	登校	登校	生介主 生活護 学際た 習際指 指導 指しは 導ては は対 一、人 対安関 一全係 でをの 個別第 に行改 う。善 。ある 。こと を銘 記して 障害 児に 対処 する。
		着換え 子学級へ挨拶 自由遊び	着換え 自由遊び	着換え 自由遊び	子学級へ挨拶 着換え 自由遊び	子学級へ挨拶 着換え 自由遊び	
9:45	2	朝の会 子学級（出） 教科学習 生活学習	朝の会 お天気坊や 教科学習 生活学習	朝の会 お天気坊や 出欠の報告 子学級（休）	朝の会 お天気坊や 出欠の報告 教科学習	朝の会 お天気坊や 出欠の報告 教科学習	
10:25		休	自由遊び（校庭にて普通学級同学年児との交流を図る。担任は主に観察）				
10:45	3	プレーセラピー（主に体育遊戯やゲーム等集団でプレイを実施する。）					
11:30	4	着換え 保健学習 清掃学習	子学級（休） 清掃学習	清掃	子学級（休） 清掃	子学級（金） 清掃	
PM 0:00		給食 （要介護）	着換え 保健学習 給食 （要介護）	着換え 保健学習 給食 子学級	着換え 保健学習 給食 子学級	着換え 保健学習 給食 子学級	
1:00	5	子学級へ挨拶 下校	自由遊び 子学級へ挨拶	自由遊び 子学級の清掃 ○帰りの挨拶 下校	自由遊び 子学級の清掃 ○帰りの挨拶 下校	自由遊び 子学級の清掃 ○帰りの挨拶 個別学習 下校（2：30）	
2:00							

これらの障害児の指導で一番配慮しなければ

ならないのは、各に異なる興味と関心の持主で

ある障害児を一つの関心に集めるかということであった。今後一層の研究が望まれる課題と言えよう。

5 児童に与えた治療学習

この障害児教育の主な目標が、対人関係の成立を図ることにあることは言うまでもない。

そこで、当情緒障害学級としては、第1にプレーを中心とするプレーセラピーを中心とし、第2には、自辺自立を図るために生活学習や生活訓練を行い、それに付け加えて第3に基礎的学習の個別指導を行うこととした。

対人関係の成立を図るためには、まず担任、介護者及セラピストとの対人関係の成立から開始した。そのため、指導者の側は障害児が興味や関心を持つものの有無について、観察するところから始め、障害児の行動を受容することを第1歩とした。

プレーセラピーで主に障害児に利用されたものを例示すると、以下の施設遊具を掲げることができる。

- | | |
|----------|--------|
| ① トランポリン | ② 自転車類 |
| ③ おもちゃ | ④ 積木 |
| ⑤ ボーリング | ⑥ 砂場 |
| ⑦ 碁石 | |

これらを、どのような利用法で用いたが要約して述べることにする。

トランポリンの例

- I. トランポリンに障害児がどう反応するか、トランポリンに対して自由遊びをさせて様子を見る。
- II. 障害児がトランポリンの1人遊びに慣れたところで、セラピストがタンポリンや手拍子でリズム打ちをして変化をつけた跳び方をさせる。
- III. セラピストが静かに乗っているトランポリンに障害児を乗せ、トランポリンの

上でふざけっこなどして遊ぶ。

- III. 障害児が自分以外の人がゆらすトランポリンのゆれに慣れさせる。
- V. 障害児とセラピストと一緒にトランポリンをする。
- IV. 変化のある跳び方をくふうさせる。
- VII. 友達を自分からトランポリンへ誘って一緒に遊べる。

碁石の例

- I 碁板に向って、一人で自由に対局させる。
- II 碁を打ち終った後、片付けを指示し片付けができるようにさせる。
- III セラピストが障害児に碁の定石等打つ位置を教わりながら打ち、対局できるようにさせる。
- III 対局を何度も繰り返し、相手が自分の前にいる必要性を意識させる。
- V 対局前、終りに挨拶をかわすことを礼儀として憶えさせる。

砂場の例

- I 砂場で自由遊びをさせる。
- II 砂場の真中に砂山を築かせる。おもちゃやばけつを総動員して運ばせる。
- III セラピストの指示に従って仕事ができるように、仕事の内容を理解させる。
- III 自分の仕事を次の人へ引継がせる。さらに、前の工程の仕事も続いて受け継ぐことができるようにさせる。
- V みんなでできた砂山で遊ぶ。

もちろんここに述べたようにすっきりとした形で指導されたり、諸用具が利用されたというわけではないが、大体はこれに近い方法で利用され思考錯誤しながら進められたのである。なおここに掲げられた例は、ある障害児には有効であったと言うことで、これが全に通じるもので

はないことをお断りしておきたい。

学習指導

情緒障害学級における学習指導については、未だこれがよいと言う指導法はない。それぞれの児童の状態に対して手探ぐりの状態と言えよう。本情緒障害学級においても同様であるが、何とか学習の形態に馴染ませるために、下のような生活カードを作成し、障害児童の発達の段階に合わせて利用して指導にあたっている。

生活カード

月		日		曜日	
天気					
9時の気温		と		休みの友だち	
あいさつ		きがえ			
はんかち		はながみ		つめ	
指導	日常生活			目立つ遊び	
	学習	図・社・算・理・音・図・算・体・道・ク・行			
通信	学校				
	家庭				

障害児1人ひとりに対する指導は、下記の通りであるが、中には担任や介護者が手を持って強制して記入方法を訓練させている児童もある。

NO. 1 月日、あいさつの記録、自由、天気、落書き、名前

NO. 2 月日、曜日、天気、あいさつ、きがえ、つめの記録、線引き、あるいは自由落書き、名前

NO. 3 月日、曜日、天気、あいさつ、きがえ、はんかち、つめの記録、休みの友達、9時の気温、自由落書

き、あるいは線引き、名前

NO. 4 月日、曜日、天気、あいさつ、きがえ、はんかち、はながみ、つめの記録、休みの友達、線引き、名前

NO. 5 月日、曜日、天気、9時の気温、休みの友達、あいさつ、きがえ、はんかち、はながみ、つめの記録、線引き、名前

中でも、NO. 2 NO. 4、NO. 5の障害児は生活カードに線引きした後、NO. 2がカレンダーを書きこみ、NO. 4は漢字や物の名前を写し書きをしており、NO. 5は前日あるいはその日の朝の日記を書くことにしている。

出席カード

障害児の中には、いろいろな事情により欠席する児童も多い。その事由が本人以外の原因ならば止む得ないが、そんな場合でもできるだけ障害児自身が登校を親に求める気持ちが育つようにと、幼稚園や保育所で実践している出席カードを作り、出席するとそれにシールを張ってあげることとした。

このカードの効果について、現状では何とも判断しかねるが、NO. 2の児童にはその効果を認めることができる。しかし、担任が効果があって欲しいと

願うNO. 1やNO. 3の障害児ではNO. 2に見られるような登校に対する意欲が湧いてきたようにも思えない。親が欠席を指示すれば、それ

に素直に従っているのが現状の姿である。

		3月				
1	2	3	4	5	6	7
					日	
8	9	10	11	12	13	14
					日	
15	16	17	18	19	20	21
					日	●
22	23	24	25	26	27	28
		は	る	や	す	み
29	30	31				

個別教育センター 小島めぐみ

6 児童の記録

昭和51年中に見ることが多かった障害児の状態像について、先に述べた児童の現状とはまた異った視点からその概要を述べてみたい。

NO.1 6才(M)

対人関係

1人遊びが目立つが、常に介護者が自分のそばに居て欲しいらしく、介護者の身にまつわりつく。

同級生に対して親切心が判断しかねるが世話をやきたがる。その反面、同級生が大声を出し、本児に近づいて来るとおどおどして逃げまわる。

目立った行動

(1学期) 数に強い関心を示し、電話帳や百科事典のNOや頁数を示す数字を厭きることなく眺めていた。

三輪車に乗れず、担任や友達に乗る自転車の後を追いかけて、荷台へ乗りたがった。

(2学期) 日めくりのカレンダーに異常な関心を示し始めた。

三輪車に乗れるようになり、走り回れるようになった。

(3学期) 月めくりのカレンダーに関心が移り、毎日お天気坊やと称する生活カードに12か月をひと月づつ順に書きだした。月初めの日が始まる曜日は、前の月から数えなくとも正確に書き、カレンダーを仕上げることができる。

まなざし

自閉児としては、どちらかと言えばよく合うほうである。

遊び

遊びの種類は多方面に渡っているが、中でも目立つ遊びは、①トランポリン、②三

輪車、③カレンダー、④遊動橋、⑤ぶらんこ、⑥砂遊び等である。遊びの状態は、対人関係でも述べたように、介護者を側において1人遊びに興ずるか、あるいは介護者の後尻を追いかけて回し遊び相手となることを要求することが目立っている。

身辺自立

衣服の着脱、歯みがき、手洗い、品物の出し入れ、排便、その他同年令普通児と同じ程度にできる。

食事については、食べものに好みによるのか偏りが目立つが、嫌なものを強制されると知恵を働かしてこぼしてしまう。スプーンを使うことより、手づかみで食べることを好んでする。

感情表現

表情に笑顔があり、笑声も「アハハ」と表出できる。パニック状態になって怒っている時は、普通児のように怒った表情とならず、大きく目を見開いて手の甲を噛むなどの動作が現われる。普通は無表現であり表情の変化を見ることはない。

学習情況

数字を1～100まで学習したが、現在はカレンダーを書いているので、主に1～31までの数字が多く使われている。

漢字と仮名で書けるのは、自分の氏名の文字と七曜日の「小」「一」「お」「き」「じ」「ぬ」「は」「め」「月」「火」「水」「木」「金」「土」「日」15文字である。

子学級との交流

現状では、朝と下校の挨拶に給食を本児の状態に合わせて実施している。学校行事等に積極的に参加させたいのであるが、通学時間の問題があるので困難となっている。

対人関係

同級生や子学級の友達の近くに寄ることはできても、仲間にはいることはできない。

担任か介護員が手を引いて連れて行けば同年令集団に近づき短時間一緒にいられるが、すぐに自己の関心のあるところへ移動するが逃げだしてしまう。

子学級へ挨拶へ行くと、子学級児童が本児に対して「おみこし、わっしょい」と声を掛け、本児のからだをかかえ上げるようにして情緒障害学級まで連れて来てくれるが、そうされても本児は別に嫌がらずにここにこしている。

指導の側について言えば、本児は男子の担任や介護者はあまり好まないのか近寄らず、どちらかと言えば逃げ腰の様子を示す。

それに対して、女子担任や介護員には身の回りにまつわりつく程である。

目立った行動

水遊びが大好きで、教室を抜け出せば廊下の水道の蛇口をひねり、水の流れる勢いを眺めたり、水の中へ手をひたして遊んでいる。冬の寒さの厳しい時期でも、平気で水遊びにふけていた。

はさみで切り紙をするのも好きのようである。はさみの使い方は上手で、度が過ぎると自分の髪の毛まで刈り込んでしまうことが見られる。

落書きが好みなのか、筆記用具を手にするところでもかまわず書きなぐる。丁度、3才児がやっている仕草のように感じさせる。

まなざし

担任と本児の間では、まなざしがわりあい合っているように見えるが、本児が顔を

横にかしげて見るので、実際にはまなざしが合っているのか判断が困難のことが多い。

しかし、呼名されると、呼ばれた方へ目が動くのだから、まなざしも合うのかも知れない。

言語・音声

話しことばはない。音声は発する。目立つ音声としては、不快の時に「キィー、キィー」、笑い声として「アハハ」、担任や介護者を指さして「アーアー」、何か力強い感じで「ウバ、バ」等を聞く。

遊び

目立った遊びとしては、①落書き、②水遊び、③すべり台(室内)、④紙切り、⑤遊動橋での遊びである。

戸外では高い所へ登りたがり、ろく木やジャングルジムの頂上まで平気で上がる。

自傷行為

別段見られない。

身辺自立

衣服の着脱は、なんとか自身でできる。

歯みがきをさせると、器用によくみがいているが、感触を楽しんでいるのか止めさせるまで続ける。歯茎を痛めることさえある。物の出し入れは、指示されればだいたいのところ間違いなくできる。

食事になると、食物の好き嫌いが極端で好きな物はさっさと食べるが、嫌いな物は介護者の目を盗んでごみ箱へ捨ててしまう。

スプーンは使える。牛乳は瓶で与えられる。とボールへあけるなどして遊んでしまう。

感情表現

不満や拒否の態度は、顔をひきつらしてキィキィと泣き叫ぶ。他人の行動を見て何を感じるのか、時折り介護者の顔を見てにやりとし「アハハ」と高笑いをする。

学習情況

せめて自分の名前ぐらい書けなくてはという親の願いもあって、10月頃より毎日介護者が本児の手をとって名前の表記練習を行った。最初は嫌がって怒ったこともあったが、そのうち観念したのか、練習を嫌がらなくなった。

その成果は、12月頃から上記のような文字を書きだしたことにより、徐々にではあるが上がり始めたものと考えられる。しかし、氏名全部の文字を憶えきるまでは、まだ前途多難と言わなければならない。

子学級との交流

本児の実態からして、朝と下校の挨拶だけにとどめている。

NO・5 10才 (M)

自閉児は一般に男子優位と言うのか、男の児童が圧倒的に多い。そうゆう中での女子障害児なので、治療教育を推進するうえで注目すべき存在である。

対人関係

担任、介護員、子学級担任、同級生との間と本児は完全にラポートをつけている。特に子学級女子同級生とはうまくいっている。

目立った行動

特別に取り上げるような行動はないが、遊びが特定のものに限定されている。

パニックにほとんど見られなくなった。

まなざし

わりあい誰とでも合う。



文字は、上から「せき・の・り・お」

言語

話しことばはあるが、反響言語が多く担任や介護者からの指示や質問が通じるまでには多少の時間を要する。

遊び

本児が関心を持つ遊びは、ブランコに乗ることだけの様である。4月に入級して以来、校庭での遊びはほとんどこれである。

どんなに激しいパニックを起していてもブランコ乗りを指示すると、その状態が下火になりやがて治まる。黙って乗せておけば、何時間でも乗っている。

遊びとは言えないが、自転車乗りとトランポリンについては、緊張時の合い間に指示すると止めがかかるまで続く。

自傷行為

現在まで見られない。

自辺自立

特別問題はない。おそらくとちのみ学園に入園していた時期に、寮生活の中で養われ自立したものと考えられる。

食事について、目立って好き嫌いはないが、1学期に比べて2学期以後食事の量が減った。

感情表現

時には笑い顔らしき様子を見せることもあるが、一般には無表情でいることが多い。

パニックの際も顔が引きつれたような状態でわめき叫ぶが、泣いて涙を見せるということはなかった。

学習状況

筆順はあやしいが、文字は漢字、仮名ともによく書け、書写も指示すればできる。

計算も簡単なものならばできる。加法では、1位数+2位数程度までであるが、指を使ったり珠算玉を利用して和を求める。

減法については、一の記号の意味が理解できず差を求めることに混乱が見られる。

体育は子学級へ参加していた。演技やルールがわからずまごまごしたが、子学級同級生に教えられたり励まされたりして、何とか子学級集団の中へ参加が可能になった。

1学期中介護者をつけて参加させたが、2学期以後は本児1人参加ができた。

子学級への参加

朝と下校の挨拶、給食、清掃、体育、行事等に、児童の当日の状態を考慮しながら参加を図り交流を拡大した。

7 障害児童観察記録用紙

この2年間いろいろな形式を考え、有効な観察記録法はないかと思案錯誤しくふうしてみたが、考案して始めてみると案外面倒で長続きしない。その中で比較的効果的に利用されているものを掲げると以下のものがある。

- | | |
|-----------------|------|
| I 児童観察簿 横線罫紙 | 毎日記入 |
| II 自閉症児観察記録 (A) | 隔月1回 |
| III // (B) | 毎月1回 |
| III 遊びの様子 一覧表 | 毎日記入 |

Iの児童観察簿については、毎日の各々の障害児の行動の特記すべき事柄を記録するように務めている。

IIの自閉症児観察記録(A)では、1日の生活及び学習状況について、次の項目を隔月で記録している。

①登校の様子 ②始業前の管理 ③学習の用意 ④座席の位置 ⑤着席の様子 ⑥授業中教室外への出歩き ⑦応答の状況 ⑧ノート・作業など ⑨共同学習 ⑩授業中の行動制限 禁止 ⑪専科補教時間の様子 ⑫指導困難な教科場面 ⑬熱中していたこと ⑭休み時間の様子 ⑮遊びのルール・制限 ⑯好きな遊び ⑰給食の用意 ⑱食事の様子 ⑲給食の後仕末

⑳衣服の着脱 ㉑手洗い・排便 ㉒当番 ㉓係活動 ㉔下校の様子 ㉕つきそっている場所 ㉖出席状況(月分) ㉗個別指導した時間

IIIの自閉症児観察記録(B)においては、対人関係(まなざし、表情、名前を呼んだ時

話しかけた時、友だちに対する関心 先生に対する働きかけ、動作や遊びのくりかえしを禁止した時、ひとりでのにやにやしたりゲラゲラ笑うこと。)

集団への参加(授業への参加、仲間との遊び)

言語(おおむ返し、寄声を発する、ひとりごとを言ったりブツブツつぶやく)

こだわりやくりかえし(同じ質問を何回もくりかえす。同じ動作や遊びのくりかえし。一つのことに関心を示し熱中すること。行動の順序が型通りきままっていること) 身のまわりの始末(食事、排泄、衣服の着脱、登下校の準備)

について記録をとり、年間の障害児童の変容の姿をとらえようとするものである。

IIIの遊びの様子の記録は個々の障害児の1か月の状態を1目では握し、児童への働きかけの手段とするものである。(次頁参照)

8 成長の記録

年間3回、各学期の終りに「成長の記録」を普通学級用通信票に貼布して親に渡している。

次頁の様な型式で、個々の項目に渡って文章表記で記録されている。観点については、先進校である宇都宮市今泉小学校情緒障害学級の指導を受けてもうけてある。

この成長の記録については、今後検討し、利用及び記録の上で役立つものをくふうしていきたい。

III 今後の課題

- セラピストあるいは介護者の増員を要望、自閉児の指導及び介護は、元来1対1指導が

()月

遊びの様子

名前〔 〕

№.25

種類	日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	計	
1	自転車																																	
2	三輪車																																	
3	自動車																																	
4	トランポリン																																	
5	すべり台																																	
6	とび箱																																	
7	マット																																	
8	ろく木																																	
9	シーソー																																	
10	ぶらんこ																																	
11	うんてい																																	
12	鉄棒																																	
13	ジャンゲルジム																																	



成長の記録

観 点	第 1 学 期		遊 び の	
	遊 び	一 学 期	一 学 期	二 学 期
1 対人関係				
2 心の動き(情緒)				
3 遊び(行動)				
4 ことば(意志の表現)				
5 興味・関心要求				
6 知的能力のあらわれ				
7 運 動				
8 生活習慣				
9 集団への参加				
10 そ の 他				
担任からの希望				

遊 び	第 1 学 期		遊 び の	
	遊 び	一 学 期	一 学 期	二 学 期
1 自転車				
2 三輪車				
3 自動車				
4 トランポリン				
5 すべり台				
6 とび箱				
7 マット				
8 ろく木				
9 シーソー				
10 ぶらんこ				
11 ジャンゲルジム				
12 滑り台				
13 築山				
14 投てき板				
15 ホール遊び				
16 砂遊び				
17 すもう				
18 かけ足				
19 電話ごっこ				
20 つみ木				
21 かき遊び				
22 テレビ				
23 おもちゃ				
24 指人形				
25 おえかき				
26				
27				
28				
29				
30				
遊 び の 様 子	何もしないことが多い			
	ひとり遊びが目立つ			
	友だちと遊べる			

備 考

※ 遊びの場所 校庭(s) プレイルーム(p) 校外(O)…遊園地、公園など
足利市立東小学校情緒障害学級

望ましいことは言うまでもない。しかし、現実の問題としてそこまで理想を達成することはいろいろな事情から考え無理な状態と言えよう。

そこで、障害児指導の改善のためにセラピストあるいは介護員を、最低1名増員して欲しいと要望したい。それによって担任2名で障害児5名、即ち1:2.5の割合を下げ障害児に対して木目の細い指導を行いたいものである。

2 自閉児を情緒学級に、もっと入級させられないか。

近年、障害児に対する就学が促進されると同時に、自閉児の就学が一段と叫ばれるようになってきた。足利市においても、現在自閉児が就学してきており、どこに就学させるかが大きな問題となっている。親の要望や治療機関の進めによって、一般学級や精薄特殊学級に入級するであろう自閉児は、現状では現場にかなりの混乱を起すであろうことが予想される。そこで、これら情緒障害学級以外に就学する自閉児を治療教育機関である情緒障害学級へ過級させられないかという問題が起きるわけである。今後予測される課題として前向に検討を始めたい。

3 他機関との連絡が密にとれないか。

近年の障害児教育は、一人障害児学級だけで治療教育を押し進めても、さして効果が期待できるものではない。一人の障害児の向上進歩を望むならば、是非とも関係諸機関の指導を仰いで、障害児にとって、より益しな教育を施してあげたいと思う。次年度への課題としたい。

4 教育内容の設定

暗中模索を続けているが、自閉児と取り組む内容を整理し、学習内容として組織化を進めたい。それによって情緒障害学級の姿が、改めて検討される時期がくると思う。

以上、言い盡せないが今後情緒障害学級がかかえる課題を取り上げて問題提起としたい。

V おわりに

情緒障害学級発足第2年目の実態を、留々述べてきたわけであるが、十分その意を盡しているとは思えない面が多々みられる。それは報告者の未熟さの故である。お許し願いたい。

今後、情緒障害学級の運営のあり方や一般学級との係わりの上で、改善を図らなければならぬ事柄が数多くあるが、今後の課題に対処しながら解決のために努力していきたいと思う。

(文責 川田)

評

この授業記録にみられる特声は、生徒各自が道徳意識変容の契機を徐々につかんでいく過程が鮮やかに示されていることである。すなわち、一人一人の生徒が、自らの生活経験の中からつかんできた自分自身の考え方を、清作や学を通して、学習集団の前に卒直にひれきし合い、多様な人間の生き方考え方にふれながら、変容の契機を発見しているといえよう。

このことは、生徒の立場からみるならば、清作および学という二人の人物の生き方、考え方に殖発され——身につまされて、——自らの生き方、考え方を極めて具体的に焦点化して、ひれきし合ったことであり、教師の立場からみるならば、生徒一人一人の考え方を大事にしながら、多様な考え方を引き出し、話し合いの場を無理なく構成できたことであろう。

この授業の成功の原因はいくつか考えられるが、特に、授業者が、一人一人の生徒を、実によく見て、よく理解しているということをあげておきたい。これは、教師と生徒との温かい人間関係の深まりを基調とした日常の学級経営の確かさを示すものであるが、このことこそまさしく、より深い資料解と指導展開を可能にした基本条件であると思われるからである。

なお、本校は昭和50・51年度文部省指定道徳教育協同推進校として、すぐれた成果をあげているが、特に、全職員による、内容項目別資料集「話し合いの組織化をはかるための資料の選定と、それにとまらう共通問題意識の設定」の編集・作成をされ、生徒の実態をふまえた資料の選定、解釈等を深められ、道徳指導の質的向上をはかられたことを、あわせてお知らせしたい。